地域をつむぐ縁結び人養成塾
集合研修　３日目　プロデュース
「成年後見センターと協議の場」
今井友乃氏（NPO法人知多地域成年後見センター　事務局長）
２０１２年9月２０日

■はじめに
私は元々、サポートちたの事務局長をしていた。
いつもは後見人の話をするが、今日は協働事例として、法人立上げの経緯を話す。

今日のお昼はAda-codaのお弁当をみんなで食べる。Ada-codaは現サポートちた事務局長でもある市野さんが始めた。市野さんは、（今井さんと）一緒だったらできるかも？と思って始めたと後から聞いた。
「今井さんが一緒にやろう！といったのに、実際に料理を作ってくれたのは１回だけだった」とも（笑）。
それで、今Ada-codaがある。こうやって継続されているのは素敵なことだし、さらに多くの市民に活用してもらいたいと思っている。

今日の会場である市民活動センターも私にとって懐かしい場所。行政の方と言い合いをしながら作った。市民の声を聞いてセンターをつくろう、と言っていた行政の人が、あるときからいきなりぱたっと来なくなったことがあった。
どうしたのかなと思っていたら、こちらがいっていた内容とは別のものになっていたことがわかった。そんなこともあったが、意図をくんでくれていろいろ交渉してくれた行政の職員がいたり、いろんな想いがあってできたセンターだったことを懐かしく思い出した。

■成年後見とは
成年後見とは、判断能力の低下によって生じるさまざまな問題から身を守る制度。介護保険は契約。でも判断能力が欠けている人だと契約は（結べないから）どうする、代理人をたてないと、ということで、介護保険と同時に成年後見がスタートした。法定後見制度には３つある。補助、保佐、後見。

後見が始まるためには、家庭裁判所に申し立てをすることが必要となる。申し立てができる人は本人、４親等内の親族、身寄りがない方は市町村長が担う。後見人は、家庭裁判所が一番ふさわしい人を決める。私たちは第３者として後見人をしているが、他に選ばれるケースは、娘、息子、弁護士、司法書士がある。いちばんカネをとる（使ってしまう）人、権利侵害をする人、それは家族だった。なぜなら、家族に入ってきたお金は同じお財布になっているから使ってしまう。

後見人はお金に関すること、本人の生活や医療に関する法律行為を担当する。たとえば、それぞれの契約がきちんとされているか、介護保険の異議申し立てをするなどがある。後見人をやるには資格はいらない、裁判所が選べばOK。
今、市民後見ということがいわれているが、ボランティア（無償）で後見人をやるというのは少し違うのかなと思っている。

制度開始前は、後見人はほとんど親族だった。でも親族間の横領が多すぎるので、裁判所が選ばなくなった。今は半分くらいが第三者となっている。後見にかかる費用は、申し立て費用と登記費用くらい。法定後見人の報酬は、実績に応じて裁判所が決めて後から支払うしくみとなっている。後見は、人が死ぬときに終わる。知多では、これまで200件くらい受けて30人くらいお亡くなりになって終わった。また、後見人の判断能力が下がったり、後見人が不適格になったら解任されることがある。
以上、成年後見制度はこういう制度だ、ということをお話した。

今、後見制度が進んできたのは福祉分野ではなく金融分野。銀行は、これまでずっと親族だからいい、という取り扱いだったが、親族の方がもめるケースが多くて、その反省からか、銀行では（後見について）厳しく取り扱うようになった。

■知多地域成年後見センター
知多の成年後見センターは全国でも有名な事業所となっている。なぜなら、行政がしっかり財政面を担保してくれているから。この形はいい、と全国でもいわれるほどの素敵な事例になっていると思う。

知多地域成年後見センターの設立母体は、３つの団体。NPO法人サポートちた、社協、行政。NPOと社協と行政が一緒にNPOをつくったというのが珍しい。
もともとサポートちたでは、１件成年後見をやったことがあった。

対象者は25歳の若者。お母さんが余命半年。なんとかしないと、ということで成年後見をサポートちたでやることになった。その頃、社協は、財布をちょっと置き忘れた・・というような方のためのちょっとしたお金をあずかる日常生活自立支援事業をやっていた。行政は、やりたいと思っていたが、どうやればいいかわからなかった。

私は法律が専門でもない、成年後見のことを知らなかった。知っていたらやらなかったかもしれない。でもサポートちたにきたケースである、お母さんが44歳で余命半年。子は25歳。知的に障害をもっている。そのときにその子をどうにかしなきゃいけない。ということを思っただけだった。サポちたのミッションは地域で誰もがその人らしく生きていけること。ミッション遂行のためにやらなきゃという気持ちだけから取り組んだ。

知的障害者の方は月に５万くらいもらってなんとか暮らしていける。
でも、その人をサポートする者は報酬がもらえない、やり続けるにはお金がいるじゃない、どうしよう、となった。知多管内の５市５町の行政、温度差があったが、知多管内の進んでいない度合が、５市５町が似ていたため、共同で後見センターをつくる方向へ動けた。

■協働の進め方
まずは非公式な会議からスタートした。目の前の課題を解決してしまうと、周りからは、その分野には解決した、ニーズがないととらえられる。とすると、同じように困っている他の人のニーズに答えることができない。

サポートちたの前代表の松下が1年に１回各自治体を巡った。お金出してくださいと、お願いしたところ、そんな例は特殊で、あなたは変わった人を支援しているだけだと言われてしまった。どうしたらカタチになるだろう？と社協の職

員さんと話していた。岐阜から先進事例をやっている人を呼んで勉強会をしたり、知多を分けた方がいいのか、など様々な議論をした。

勉強会の次に行政職員と一緒に先進事例を見学に行った。行政にとっては、税金を使うにあたって、何に使っているということを明確に示せるかということが大事となる。良かったのは、NPO発ではなく、知多市の行政主体で呼びかけをしてくれたこと。行政主体で呼びかけたので、知多半島の５市５町の行政職員全員が企画にのってくれた。

先進事例として訪問した東濃後見センターは費用対効果の数字が出せた。たとえば、後見センターがあることで本人が、税金を払えるようになった、市営住宅必要がない人が返せるようになった、など。このとき、バスツアーで企画したが、よい面がいくつかあった。まず、みんな同じバス一台に乗っていくので、行きも帰りも話を聞かざるを得ないこと。また、同じ場所で同じ話をみんなで聞くというのが大事だったと思った。

知多市が言い出し人になり、成年後見利用促進事業調整会議が開催される、５市５町が全部集まった。そこで３、４の市町の方が「やる」といってくれた。他の人は「いいことですね」という感触。オブザーバーとして、NPOと社協も参加した。これは珍しいことだった。

また、行政の職員さんが、会議のあとも事務所にやって来て会議はこういう理由でああいう発言が出たとか、こっそりと市町を回ってくれたなどのフォローをしてくれていた。

また途中で、９の市町だけで成年後見センターをやることになりそうになった。でもそんなときに動いてくれた行政職員さんがいた。契約書の案をつくって、まだ了解していない１つの市に示してくれた。行政は横並びが好き。結果として10の自治体全部にサインしてもらった。

なによりも、丁寧に会議をやった。課長会議、部長会議。丁寧にプロセスを積み重ねて。1年間の会議の中で、行政の言葉や行政の中で予算を獲得するのかがわかり、とても勉強になった。

今ふりかえって、うまくいった理由は、行政職員の中で成年後見をうまく生かしたいといってくれた職員がいたから。たとえば東海市の職員。サポちたが成年後見をやりはじめたときからずっと注目してくれていた職員。講演会をすると、必ず後ろの方の席に座っていた。行政はやはり行政職員が説明する方がよくわかるようだ。役所の中で話していることと、外で話すことは違う。

お互いの環境とか文化とかどこに向けて話をするか、によって話し方は違う。「人の命がかかっている。お金がいるんだ」というと、「橋を作らなきゃいけない。道路も直さなきゃいけない。」と。あなたの町では人の命よりも道路が大切か？ときくと、だって市民がそれに同意している、市長がそういっている、と。

私は、成年後見センターは他の人がやるのかな、と思っていた。が、行政からお金をもらったらモノがいえなくなった、みたいなことを避けるために自分が事務局長となった。ほとんどが委託料だが、継続する組織になっている。４０人定員の保育園をつくるイメージでやろう、と役所の人に言われた。役所のいいところは、１回出したお金は例年通りと出し続けるところ。だから、これでやってみよう、と思った。役所の人に「お金を出してよかった」と思われるところにしようと一生懸命仕事をした。

1年終わる前に、「２年に１回お金の見直しをしよう」そう言われたのがとてもうれしかった。ありがとうございます、と言われる、言える関係にしたい。

また、継続的に運営するため、運営委員会を３ヶ月に１回開催している。１０の市町の課長レベルの会議。どれだけ仕事をしたか、という報告をしている。相談何件、お金をどうやって使っているか、ということを明らかにしている。

後見センターの特徴は、NPO、社協、行政の協働事業だということ。対等に話をしている。

協働がうまくいったのは、課題が現場発信だったから。現場がしっかりと課題を伝えた。受けとめられるNPOネットワークがあった。知多の市民活動という土壌があったからできた、とよく言われる。行政の職員も、「あの人大学の同窓生だから話してくる」のような関係性で話をつなげてくれた。

抱えている課題はバラバラ。自分たちのような小さな町でこんなことが起きたら乗り越えられない。しかし、みんなで持てば、事務所の設備も少なくて済む。その当時一緒に仕事した人たちとは今もおつきあいさせてもらっている。

■後見センターその後
キーパーソンはとっても大事。NPO、行政に課題をわかっている人がいるのが大切なこと。必要なことには行政はお金をつけてもらえるんだということも分かった。しっかり話をして、しっかり伝えること。必要なことは言い続けること。できない＝やる気がないと思っていた。

今は福祉関係に特化しているが、いろんなところに知り合いの行政職員がいる。地域への周知イベントとして、大府の健康の森で啓発フォーラムを開催した。この地域にこれが必要と示す、行政に対してこれが必要と示す。準備にも行政&NPOがからむこと。こういうことも大事なのかなぁと発信していく。

配布した資料のグラフは協働でやるときはいいときばっかりではないということを示したかったもの。紆余曲折を経ながら、うまくいくときは、だんだんうまくなっていき、どこかですっと上昇する。そういうことを伝えたかった。

＜質疑応答＞

〇事務所が２カ所あるそうだが、自分の市につくってほしいという話はなかったのか？

・ 自分のところの市が困らなければいいという行政のオーダーだった。巡回相談も実施しており、必要なときに必要なところへ、いわれればどこへでも動く。
・ 知多と半田が場所を提供するという話が出ていた。10の市町は広域で組むということをやったことがある町。だから暗黙のうちに話が進んだようだ。

〇北部／南部で負担金の違いはあるのか？税収の違いがあると思うが？

・行政の方が話し合って決めた。

〇NPO法人をつくったのはなぜか？

・ サポートちたは地域の課題を受け止めるところ。それよりは、別法人がいいだろうとなった。また、利益相反ということからも、特定の法人につながっていることは避けたかった。

※利益相反…ある行為により、一方の利益になると同時に、他方への不利益になる行為である。

〇社協はどういうかかわりだったのか？

・ 社協は単独でやりたいと考えていたが、お金がかかるので一緒にやった方がいいとなった。社協は行政に対して信用性がある。
・ センターにとってありがたかったのは、社協の職員が２年派遣されたときに、派遣職員の給与が下がってはいけない、ということで、適正な給与体系ができたこと。

〇想いを共有するためのツールは何かあるか？

・ バスツアーで先進地に視察をした。私と同じように行政の人に思ってもらう、というのは無理。行政はみんなの税金をもらってやるから、みんなのことを考えないといけない。これは課題だから市民にとってこんないいことがあると示せれば事業として挙げることができる。

・ 想いを共有＝みんなが助かるんだということを示すことができる。
・ 行政とやってよかったことそれは「お金」。「お金だけですか…」と言われたけれど、お金がないと何もできない。行政内部は、財政部門を納得させないといけない。ここにお金を使えば市民に効果があるんだよと伝えて行く。

〇社会は何を求めているか？という問いに「後見」という軸でしぼった理由は？
・ 愛。私は目の前の困っている人をなんとかしたいと思って動く人。これをほっといてはいけない、明日からゆっくり布団で寝れらないと思ったのがきっかけだった。
・ 目の前のことができないのに、大きなことはできないと思う。みんながちょっとずつ手を貸して助けていければ十分。たまたま出会ったのが成年後見だった。
・ 成年後見をしていて、助け合いとか地域の活動がほんとに大切だということを再認識している。私たちが助けている人は、地域のつながりが切れている人。本来やらなきゃいけないことは、その地域のつながりを結び直すこと。
・ 好きな人だけで活動してませんか？とNPOの人に言う。嫌な方も１ヶ月に１回つきあってください、と。私自身、嫌な人とも１ヶ月に１回つきあっている。そうしないと爆発してしまう。

〇今後成年後見人制度はどうなっていくか？
・ 被後見人は今後どんどん増えていくと思う。民生委員さんや研修で養成していくことが必要になってくる。今後は、見守り、地域でささえていくしくみも求められて行く。

〇市民の方に後見制度を知ってもらうための活動で何をしているか？
・ 広報としては、地域でのフォーラムを、毎年会場を変えて実施している。
・ 研修事業では、成年後見のサポーター養成事業を開催（５年で知多半島を一周）。地域で啓発のために話をしたりしている。
・ また、センターを活用して「こういうことがあってうれしいわ！」という声が寄せられた場合は、住民から直接行政に言ってね、という話もしている。

○ 利用調整会議にオブザーバーとして意見を言ったのか？どんな役割があったのか？

○ また、裏で動いてくれた職員さんは会議ではどんなかかわりかただったのか？

・ 資料はこちら側が作っていた。おかしなことを言っていても指摘せず、黙っていた、質問に答えるのみ。社協は社協のネットワークで動いてくれていた。社協は福祉課とつながっているので、そちら側からも働きかけてくれた。行政の職員は、味方になる発言はいっさいしなかったが、NPOのことを信用してくれていた。